

研究・調査報告書

報告書番号	担当
26	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and binge drinking in young adult childhood cancer survivors. 若年成人の小児期癌生存者におけるアルコール消費と過剰飲酒	
執筆者	
Rebholz CE, Kuehni CE, Strippoli MP, Rueegg CS, Michel G, Hengartner H, Bergstraesser E, von der Weid NX; Swiss Pediatric Oncology Group (SPOG).	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Pediatr Blood Cancer. 2012 Feb;58(2):256-64.	
キーワード	
小児がん、アルコール消費、若年成人	
要 旨	
目的： この研究では、スイスにおける若年成人の小児期癌生存者と一般集団の飲酒および過剰飲酒の頻度を比較し、社会人口統計学および臨床的決定要因を評価した。	
方法： 1976～2003年に診断された際16歳未満であった、5年以上生存し現在20～40歳の小児期癌生存者に質問票を郵送した。報告された飲酒及び過剰飲酒の頻度は、代表的な一般集団の調査であるSwiss Health Surveyと比較された。頻繁な飲酒および過剰飲酒の決定要因は多変量ロジスティック解析にて評価した。	
結果： 条件を満たす1,697名の小児癌生存者のうち1,447名とコンタクトが取れ、73%にあたる1,049名から回答があった。小児癌生存者群は、コントロール群よりも飲酒頻度（オッズ比1.7、95%信頼区間：1.3～2.1）および過剰飲酒頻度（オッズ比2.9、95%信頼区間：2.3～3.8）が高かった。過剰飲酒のピークの頻度は、一般集団の18～20歳と比較して小児癌生存者では、男性の24～26歳において観察された。小児癌生存者群・コントロール群どちらにおいても、社会人口統計学的決定要因（男性、高学歴者、フランス語・イタリア語を話す者、北ヨーロッパからの移民の背景のある者）が飲酒パターンに最も強く関連していた。	
結論： 今回の研究において判明した飲酒の頻度の高さは重要である。我々のデータから小児癌生存者はルーチンのフォロー期間中に飲酒の健康効果に関する情報提供を受ける方がよいということ、そしてそのようなカウンセリングが臨床ガイドラインに含まれるべきであるということが示唆された。小児癌生存者への健康のための介入を進められるために、小児癌生存者における飲酒の動機について今後検討すべきである。	